

せかい

extrakaise

せかい

「きっと聞こえる、その声が。きっと聞こえる。だからね、大丈夫だよ、君のことずっと見て
いるから。遊んでらっしゃい、この世界で」

心の中に塊があって、それがあたしの魂だってさ。目を閉じたら確かに何かを感じるんだ。もやもやというか、不確かだけれど何かあるんだってことを。でも、あったり無かったりする。感じるってことはすごく不確かなことだけど、でもそれがあたしの感覚だから、あたしはそれを現実だと信じます。

世界って、あたしのどこらへんが世界なのかな。あたしの触れている空気が続いて世界が広がっているのかな。でも、あたしの体も世界の内、あたしのこの手も足も目も耳も世界の内なのだろう。昨日食べた、りんごだって、あたしの中にあって、あたしを作る世界の一部。昨日のことだから、忘れたけれど、いったいなんでもりんごなんて食べたのだろう。多分、目の前にりんごがあって、あたしが食べたいと思ったからかな。忘れてしまったことを考えるのは滑稽なのかもしれないけれど、理由を知りたくなるのが自然かな。どうかな、忘れてしまったものは、分からないはずだ。なのに考えてしまうんだ。世界のことも同じ、たぶん生まれた瞬間は分かっていたけれど、忘れてしまったんだ。それをいま考えている。空が青くて、それが当たり前で、今日はたくさん走ったから、体が熱くて痛くて動かなくて、畳に寝転んで、涼しい風を浴びています。目を閉じれば、頭の中をグルグルと同じイメージが繰り返しています。世界はいつはじまったのかな。小さな白い点が、放射状に黒い闇の中を広がろうとしている。時間が止まっているのがわかる、小さな白い点は少し広がろうとして、止まってしまう。目を開ければ、またはじめから、小さな白い点から始まります。繰り返し連続的に。

夕立の後は涼しい風が吹いてきます。世界はどこかにある。世界はすぐそこにもずっと向うにもあるんだ。いつも聞こえるのはこの世界の響き。あたしの暮らしに比べたらずっと緩やかだけれど、響きあう音楽が聞こえる。星の声に耳を傾ける。人は人で響きあい溶かしあって生きている。戦ったり、戦わなかったり、その繰り返しだけれど、何かしら響きあっている。世界に答えを求めるのではない。あたしは知っていたのだから。あたしの中を潜れば見つかるかもしれない。確実に知っていることは、もう忘れてしまったということ。あたしはもう覚えていないということ。それでも世界はあたしを包んでいるんだ。あたしを含んでいるんだ。インクルードですよ。

デカルトが言った「我思う故に我あり」それから世界が始まったわけではないけれど、デカルトは何かを始めたのだろう。なにを始めたのか、それは考えることか、いや何か違うな。もっと上手く言えればいいのだろうけど。あたしは言葉でいろんなことを思うけれど、言葉が無かったらあたしは思えないのかな。デカルトの言ったこととは違ってくるけれど、言葉について思ってみたりする。でもね、この部屋の広さを言葉で分かっているわけじゃないから、別に言葉が無くても考えられるのではないかな。でも、その分かっているというのは言葉じゃないけれど、その分かっていることからいろいろ関連付けて考えるのは言葉が無いと難しいんじゃないの。いや、でもね、サッカー見てたら何となくパスの出るところが分かることがあるんだけれど、それって言葉では考えてないよね。あ、って思った瞬間には分かっているんだから。だから、やっぱり言葉が無くても考えることはできそうかな。

そういえば、そういえば、今日の練習試合は負けたね。スコアを付けてて思ったけれど、なんかシュートの数が相手の半分で五本しかなかったね。これじゃあ負けますよ。で、終わってからあたしは四十分くらい炎天下で走りました。スコア一付けてるだけでも暑くてたまらなかったけど、一応運動もしないとね。汗かくの楽しいし。それに、見てるだけじゃつまらないからね。それで今はお家で、昼とお友達です。

「かあさん、麦茶くんできて」

小さな声で、台所に向かって言いました。そしたら、

「自分でくんだら？」

そうですか、そうですか。じゃあ麦茶は我慢します。

「トマトが食べたい、とっても冷たいやつ」

世界はいつもあたしを見ているはずだけれど、あたしはそのことを知らない。あたしは小さな世界しか知らない。世界史の授業は小人数制だ。教室に十人しかいないね。みんな左サイドのお城が見える窓側に固まっているから、右サイドはがら空きですよ。先生がどこに座ってもいいよなんていうからね。おじいちゃん先生、白い眉毛がなんだか、優しさを醸し出しているよ。理系なんだから地理とればよかったのに、世界史は覚えることがたくさんありますね。

窓の外を見ながら、世界について考えてみる。世界史は人の歴史、でもこの世界はそんなところから始まったわけじゃないよね。あたしを取り巻いているこの世界はきっとずっと昔に始まったんだ。たしか、物理で分かっているのは百三十七億年前に宇宙が誕生したということらしい。らしいね。本当なのかな。そうそう、ビッグバンというもののイメージが白点が放射状に広がっていく姿なのね。だからあたしは、それを宇宙の始まりと思っている。

「あいさん読んでください」

おじいちゃん先生に当てられた。

「はい」

あたしは教科書のあるところを読んでいく。おじいちゃん先生は、男の子は苗字で呼ぶのに、女の子は下の名前と呼ぶんだ。

「ありがとう」

おじいちゃん先生は、あたしが一つの節を読み終わるといつものようにそう言った。あたしが読んだところは歴史が刻まれていたはずだけれど、なんだか実感が沸かなかった。デカルトさんはまだまだ出てこないようだね。

お昼になってお弁当をあけると、チキンライスがいっぱいに入っていた。今日は白いご飯じゃないんですね。少し残念だった。少し暑いから、叫びたくなった。「暑いんや、バカたれ」とかなんとかね。でも、思っただけで終わり。

電車に乗って家に帰る。もう六時半だ。あとどれくらい経てば寝れるのかな。明日もまた暑いのかな。世界はいつも光が溢れそして闇に帰っていく。いつものように繰り返される。繰り返されることが当たり前になっている。でも、その世界は本当に繰り返しているのだろうか。ただあたしがそう思い込んでいるだけかも知れない。昨日と同じ時間に電車が走っている。でも、その時間って本当に同じなのかな。あたしは、目を閉じている。すごい眠気。意識が今にも飛びそう。頭がカクンっとなつては、また意識が飛んでいく。体の奥まで入っていく感じ。体全体を包み込む意識。あたしは体と一つになっている。「なぜ、あたしは死ぬのだろうか」人は皆いつか死んでしまう、そのことが限りない恐怖。目を閉じて、体を感じる。あたしは生きていることよりも、死んでしまうだろうことを意識する。額には汗があった。電車の中には人がまばら、そろそろあたしの降りる駅。

お風呂に入って、ご飯食べた。そしたら寝てしまった。あーあ、また学校か。宿題してないや。心の中のモヤモヤがあつて、それを吐き出してしまいたい。でもあたしと絡まって全然出てこないの、少しだけ気持ち悪いだけだから、まあいいか。

知りたいと願っているのはあたしなのか、だれなのか。分かんないな。なんか、世界のことを知りたいということ。きっと、あたしでない誰かの思考があたしの元に巡ってきて、それに浸っているだけなのかも。世界中に巡る思考。きっと越えられることもあるの。昨日も一昨日もその前も、同じこと考えていた気がするけど、たぶんそれは間違いだろう。たぶん、今日とは違うことを思っていたんだろうね。心が溶けて、少し空間に広がっていく。地球の上みたいなのに、下に引張られない世界。宇宙空間みたいなところで、少し広がっていくんだ。あたしはとても小さい

から、ほんの少しだけ広がるのみ。記憶をたどれば、いつかの日にたどり着くのかな。あたしがもっと大きかったときに。唇を噛めば、世界と再び繋がっていく。体を伝う感覚があたしと世界をつないでいくんだね。

世界史の教科書を読んでいる。電車の中で読んでいる。でもね、全然頭のなかに入っていないんだ。だれが何をしたということしか書いていないのに、全然頭の中に入っていないんだ。あたしには世界史というものに対する実感が無い。単なる、文字の羅列のようなきがしてくる。一ページしか読んで無いのに、ものすごく長く読んだ気になる。退屈で退屈で、でもね、あたしはいつも学びたいと願っているんだね。世界史を知りたいと思っているんだ。まあ、とりあえずだよな、とりあえずですよ。意識するのは電車の中の人の目。きっとあたしのことをみて、勉強なんかしてるバカじゃないのって思っているのでしょう。そう思われているのか、いないのか、それが気になって、どうにもこうにも、続きません。本当は、単に自意識過剰なだけなんだよねえ。だれも、あたしのことなんて、気にかけてませんよ、そんなただの多くの人の一人ですから。記憶が途切れたら、そしたら、飛び出せるかな、何かを切り捨てるように、飛び出せるかな。

あたしの答えはこの宇宙の中にある。でもね、簡単に宇宙とか言うけど、あたしは宇宙のことなんて僅かしか知らないんだ。でも、たくさん分かっているような気がするから滑稽だね。ほんとあたしって馬鹿だね。何も知らないのに、何かを知っている気になっている。でも、体と心が教えてくれるから心配していないよ。聞こえる声に耳を澄ませばきっとね。そう、きっとね。この宇宙の記憶。

世界と繋がるかな。世界は繋がるかな。世界ってでも、何なのだろう？ きっと宇宙と同じで私は僅かしか知らないんだらうね。きっと、ほとんど知らないんだらうね。あたしは海辺で遊んでいるのにすぎないのだから。でも、ここで生きているよ。不思議だね。生きるってことは、時の流れの僅かにしか存在しないのに、いろんなのを求めてしまう。そう、あれが欲しいとか、これが欲しいとか。そんなのばかりだけれど。

世界史の教科書の重さは、あたしに答えてくれるよ。たぶん。

ある映画の名言、『考えるな感じろ』。考えることと感じることに境はあるのだろうか。どこに境目があるのだろうか。考えることと感じることは同じではないか、ただあたしが受け入れるまでの時間の長短だけで決まるのではないか。そんな風に思ってしまう。考えるって、時間の長さだけをあらわすような気もするね。でも、答えなんて浮かぶのは一瞬ですよ。

あたしは何も知らないよね。この世界に起こっているいろんなこと、いいと言われることも、わるいと言われることも、あんまり知らないよね。あんまり知らないから何にも思わないよね。何とは無くあたしは生きていくのだろう。戦争も平和も実感なく、何とは無くね。いまこの瞬間はね。そうこの考えも瞬間のこと。

「あいさん、つぎ読んでください」

あたしは「はい」って、元気良く読みますよ。元気良くよくね。

世界は行き詰っているんだって、世界は行き詰っているんだって。あたしはまだ高校生なのに、そんな世界に暮らしている。行き詰っているんだって。困ったな、困るのかな。人はいろんなのに縛られている。ほんと、縛られすぎだよ。ほんと欲張りだよ。

世界が終わる夢を見た。何かがぼろぼろと崩れ落ちて変な塊になっていった。あたしは何故かそれを見ながら笑って、泣いていた。変な塊はたぶん消えてしまう気がした。世界から何もなくなってしまう。何も無いから世界は存在しない。何もなくなって、ただ無いということだけと言えるようになるんだろう。

世界が終わる夢を見た。あたしが死ぬのもこんな感じかな。あたしは死ぬのが怖い。でも、いつかは死んでしまうんだね。それはすごく当たり前のこと。だからこそ、怖いのかな。死ぬということは世界のすべてが経験することだから。望んでも、望まなくても。あたしは悲しいのだろうか。

心の中の塊が、いろんなことを訴えてくる。あたしはそれに答えられないの。なんだかね、あたしの周りをみるだけで、何かを考えて行動している気になっているの。あたしは本当は不安の中を進まないといけないのだろうね。だって安心なんて本当はまやかしかから、科学が何でも分かるっていうのと同じ、本当は科学は何にも説明できないのにね。誰かが言ってたよね、科学は仮説だ、って。ほんとそのとおりだと思う。ほんと。安心なんて、得るものじゃないね。不安だから生きようとするんだよ。不安のなかこそ全力で進むべきなんだよ。何も分からない手探りなんだよ。これが終わればおしまいなんてことはないの。あたしは何かを分かった気になっているだけ、あたしは何も分かっていない、でも、分かっていないことを知らない。なんて馬鹿なんだろうね。分かっている気になって、安心して、何も知らないんだろうね。正しいも間違いも、世界には存在しない。ただ、何かの束縛に合うか合わないかが違いなだけ。

ほんとうは、何を言いたいのかな。あたしはあたしに何を言いたいんだろう。こんなままじゃ世界の果てなんて、夢のまた夢。あたしは何を思えばいいんだろう。伝えたいこと、ほんとうは無いんじゃないの。書きたいことすら本当は無いんじゃないの。楽しようとして、立ち止まって、馬鹿みたい。ほんと、何もわかつちやいないね。その心を縛っているのは何。不安なの、慢心なの、それとも、何か別のこと。教えてよ、そしたら、世界と繋がるだろう。効率の良い生活なんてあるのかな、ただそんなことを思うだけで何もしていないからただ、言葉に縛られてただ、欠けてしまっているのだろうね。偉いとか偉くないとかは人が決めること、あたしが思うことではない。あたしが決めることはただ、生きる意志を肯定することだけ。頭の中から、あたしを縛っている多くの幻想が消えてしまえばいい。訳のわからない、根拠の無い幻想なんて消えてしまえばいい。

「あいさん、そこ読んでください」

「はい」

あたしは元気いっぱいになる。読む読む。聞こえていますか。聞こえているよね。あたしの声が、そこにある言葉の意味が。世界は巡っているんだね、こうして世界は流れてきたんだね。その感じ、それを大切にしたい。前をみたら武史は寝ている。ちょっと、あたしの中でいいところなんだから、起きてなさいよ。なんて思ってしまう。ただの世界史の教科書なのに、なぜだかすごいことが書いてある気がしてしまった。

「あいさん、ありがとう」

おじいちゃん先生は、そういうと黒板に書き始める。

あたまの中をグルグルと回っていく言葉があるけれど、それを外に出してしまうことは難しい。捕らえようと追っているけれど、いつも手をすり抜けていくんだ。世界は美しいのだろうか。悲しみは伝播するけれど、あたしが持ちえる悲しみってなになのだろうか。夕焼け空が教えてくれるんだ。かなしみよこんにちは、という具合にね。

世界は美しいなんて誰が言ったのだろうか。あたしは本当の所を知らない。だから何も想像してはいけないんだ。いけないんだけど、グルグルと巡って気持ちわるくなる。そう、あの感じ、青い春の感じ。手を何回も叩く話。幸せなら手を叩こうなんて、皮肉だよ。何故だか、悲しくなった。涙は少しでた。暗い部屋で、見た映画の後味のような心もち。ペラペラの世界は、だれも知らないんだ。きっと、ここから這い上がることは出来ない。背中から、全てを切り離す感情。黒く塗った床にあたしを見るの。きっと、あたしは越えていける。青い春ってなんだろうか、青い春って言うのは、せいしゅんって呼ぶんだよ。たぶん、いまのあたし。そのものことなんだろう。手を叩きすぎてはいけない、世界と離れすぎてしまうから。世界はその上にあたしを存在させていく。悲しいかな、それでも、言葉がグルグル回るんだよ。かなしみよ、こんにちは。

でもね、たぶん、それでよかったんだろうよ。人生は選択だ。

恋はあたしのほかには誰も分からないの、あたしの心と体を感じるだけのことそれだけのことなんだ。ほかのだれにも分からないあたしだけの感覚。心と体の作用。心と体があたしを越えていくんだね。ただ前の席にいる人にあたしは恋をしている。世界史は席が自由だけど、いつもあたしの前にすわる人。この気持ちはあたしにしか分からない。誰にもわかんないよね。でも、それがいとおいしいんだ。

武史のことは、いつからか知っていたんだろうか。こんなに近いから、ずーっと昔から知っている気もするけれど、それは嘘だよね。武史の声は、いつもそこにある。多分ね。あたしを抱きしめたりはしないけど、頭をなでてくれるんだ。聞こえるよね、武史の声が。いつも、遠くに、近くに。

「授業終わったよ、おきなよ」

武史のあたまをはたいている。武史はあたしを大きな目でみると、少し笑って目を閉じた。舌先を唇からだしてあたしを誘うんだ。夢の世界へと。あたしは、武史にされるのを真似て頭を撫でてやる。なんか変な感じ。

煌く星の上に、あたしは生きれない。遠くから見ているから美しい。澄んだ空気が何かを語るんだ。きっとあたしは、どこかに新世界を望んでいる。この世界が逆転してしまって、振り出しから始まる新世界。全てが頭で作られた新世界。理想のままの新世界。でもね、そんなの何かに反するよ。心と体に反するよ。あたしは、いまここにいる、そのことは否定できない、だから、全て頭の中で作られた新世界は肯定できないんだ、あたしの心と体に反してしまうから。あたしは多分何も求めない。ただそこにある、世界を知るだけだ。いいことも、わるいことも、いろいろ知って、いろいろ感じるだけ。

でもね、越えていきたいな。何を越えていくかは分かんないけれど、越えていきたいんだ。心を解き放つんだ。きっと世界はそこにある。旧世界も新世界もひとつの世界。そして、星は瞬くんだね。

夜の星と向かい合い、あたしはあたしに近づくんだね。

世界はそろそろ何かを求めている。そろそろ、何かを起こそうとするのではないか。あたしは、これまで生きてきたけど、何も分からないんだ。ただ、時代と呼ばれるものがあって、世界は巡り巡りいまこの時代にたどり着いたということしか。そう、そんなことしか分からないのだよ。でもね、きっと。飽和している現代が、嵐に巻き込まれて、消し飛んでしまうだろう。たぶん、だれも不安に思っていないことからそれは始まるだろうね。気にかけることすら問題にならないところが問題になるんだよ。あたしは何も知らないよ。本当に、何も知らないよ。何も知らないのに、何かを知っている気がするから滑稽だよ。本当に、滑稽だよ。多分ね、ただ、歩いたことがあるということを知っていると勘違いしているのだろう。知っているなんて、おこがましくていえないけれど、昔そこは歩いたことがあるよ、そういうところのことと言えればいいかな。考えることは、楽しいことだけれど、たぶんそれだけじゃなく、それに加えて、だれかと話すことをしたらもっと楽しくなるよ。人の頭の中や、心や体の感じ方を知ろうとする作用は、目の覚めることの連続である。人と交わす、あいさつ、それを大切にできる人にあたしは、なろう。恐れないこと。

その上で、世界について心を巡らすんだ。この世界の明日を憂うんだ。どうなるのか、知らないとは言わないよ。どうなるかは分からないけれど、あたしは、世界のことが気になるんだ。だから、なにかあたしの考えたところのことを、そこに表したいんだ。

はっと、驚かされることの毎日は楽しいだろうね。本当に楽しいだろう。驚きと発見の毎日は、あたしを遠く遠くへ連れて行ってってくれるだろう。それが楽しみだけだね。

たぶん、そう、たぶんね。人のことが怖いのではなくて、自分のことが怖いのだろうね。自分しか、世界にはいない。そんな風に思ってしまうだろう。世界は広く、そして、その世界にはさまざまな形が存在する。あたしだけが形ではない、あたしが認識しているものごとの数だけ形が存在するんだ。だからって、何が言えるわけじゃないけれど、そんな風に思わなきゃ、世界と対話なんて出来ないよ。あたしは、ゆっくりとあたしの速さで歩いていくんだよ。

クラブを終えて家路につく。駅まで十五分くらい自転車で、それから電車で揺られます。六時の電車は見たことのある制服でいっぱい。あたしは、眠たいから、席に座らなくても寝れますよ。今日も疲れたな。何したから疲れたのだろうか。そんなの忘れたよ。忘却の彼方です。きっと、明日も同じふうかな。

あれが足りないとか、これが足りないとか、頭で考えすぎても何にもならないよ。それより、心と体と対話しましょうね。心と体があたしのことを良く分かっているんだから。だからね、直感が大切な。今日は、ハンバーグが食べたいな、という具合ですよ。お昼に母さんにメールしてきました。今日は、ハンバーグが食べたいな、という具合に。母さんは、絵文字で何か送ってきましたよ。オッケーみたいでした。

お風呂から上がると、晩御飯を食べます。家族は先に食べているから、八時に食べるのはあたしだけです。母さんは、あたしの前に座って、じーっと見えています。いつものように、じーっと見えています。あたしのことかな、それとも、食べ物のことかな。

「ハンバーグしてくれて、ありがとな」

「今日のは少し小さいけど我慢してよ」

あたしは、そんなこと気になりません。だって、こんなにおいしいのが食べれて嬉しいのですから。

「今日、武史がね・・・」

その後、あたしは武史の話をずーっとしてたね。九時になって、

「そろそろ宿題しないと、ごちそうさまでした」

あたしは、両手をあわせて軽く頭を下げる。おいしかったですよ。最後にオレンジジュースを一杯。

九時から十一時までの二時間勝負、それで出来んのは諦めですよ。諦め。たぶん英語の予習の意味調べだけで終わってしまうかな。いつもそんなのだから。でも、それでいいですよ、出来ないことは出来ないのですから、欲張ってもなんにもなりません。まあ、十分したら寝ているかもしれないですけど。眠たいときも諦めですね。睡眠は優先します。そしたら明日は早起きですね。起きれるかな。ほんとうは六時間睡眠ではたりません。八時間は寝たいよお。今日はどうかなあ。明日は世界史はないね。英語に数学に古典に体育と数学か。数学二つはきついな、それに英語、あるし。

限りなく未来は平坦で、どこを見ても凸凹などなく、水平線が日没を抱いているような気さえする。そんなことがとてもいい未来をあらわしているわけもなく、ただ終焉を迎えることの美しさを称えているようで、なんとも悲しい気持ちになった。缶ジュースの飲み口で唇を切ったことはないけれど、あれがなんで鋭くないのかは、なんとも不思議である。いつの間にか唇から血が出ることはあるけれど、あれで口を切ったことはない。でも、小さな頃、缶ジュースの栓をしているのを踏んで、足の裏を切って血が出た記憶がある。この世界もアルミ缶のように凸凹のない未来しか抱いていないなら、もう終わりが近いということなのかもしれない。いろいろあって、凸凹ならば、まだまだ先は長いかなと思ったりする。唇から血は出てないけれど、記憶は遠くをさまよっているんだよ。傷がつかないけれど、自分の内側から破られてしまうような事態になるんだ。越えるべきものはそこにあるのかな。美しさは終焉を称えているんだろう。そんなこと誰が言ったのかな。だれも言ってないよ。朝日が昇る姿が美しいかな。あれはあれで、また違う感じの美しさを称えている。きっと、あたしの思い込みだろうよ。美しいものはただ美しいのだよ。

。

あいは歩いているんだね。ただ歩いているんだ。何を思うでもなくただ歩いている。右の後ろで髪を結んでいるのが、何か魅力的なんだよね。大きすぎず、小さすぎない背中。

世界の中を歩いているってだれが言ったのだろう。世界は広いらしいけれど、なんだかどこにいるかわかんないから、いろんなことが分かんないな。でも、そんなこと気にしても仕方ないね。ただ、この世界を進み続けることがあたしの今かな。でもね、本当はそんなこと分かってないんだよ。それが答えかな。

世界史の教科書を開いて、落書きをする。なんて書こうかな。全部あたしは知ってるよ。なんて書きたいけれど、そんなこと書いても嘘だから、なんとも言えないね。何でだろう、だれも知らないこと知っても、テストの役には立たないんだ。だれでも知っているはずのことしかテストの役にはたたないんだ。そう、そんなことが疑問。そんなことを考え出すと、どんどん、どんどん、そんなことばかりが浮かんでくる。類似品が思考の水面に浮かびあがってくるんだ。ぷくぷく、という具合に。だれもが知っているだろうこと、すごく当たり前のことを覚えるのは何故かしらつらい。全然あたしの心をひかないからね。ただの言葉でしかないのかな。ホントただの言葉でしかないね。でもね、何が大切なのか誰かは知っているでしょう。そう、思考することが大切な。だからね、あたしはテストの為になる言葉は覚えられないけれど、なんでだれもが知っていることが大切なのかということを考えるんだ。そうやって、何で勉強するのだろうかとか、そこに意味はあるのだろうかとか、そういう類のことが頭に浮かぶのを予感しつつ。ただただ、肩の方に焦りを感じながら、ただ本を広げて今日も、授業を受けている。

「あいさん、読んでください」

「はい」

この繰り返しだけが、あたしを呼び覚ます。きっと、最後にはこのとき読んだことだけが頭に残るのだろう。読んだ内容なんて、絶対覚えていないから。

お茶を入れてしまえば、次のお茶を入れるまでほとんどすることが無いから、あたしはぼーっ
としている。今日は、美佐はお休みなので、あたし一人だ。いまはみんなシュート練習をして
いる。あたしは部室の前にちょこんと座ってその様子を眺めている。なかなか枠内に飛ばないも
のですね。五人連続でゴールの外に飛んでますよ。キーパーは反応することもなく、ただ眺めて
いるだけの感じ。これじゃ、点は入らないよね。せめて枠に飛ばさないと。みんな何を思ってボ
ールを蹴っているんだろう。変なの。

この世界に完全なんて存在しない。この世界に絶対なんて存在しない。だれもかれもがそのこ
とを知っているのかな。知らないのかな。世界は物理法則によって支配されているんだと、目を
輝かせながらいう人にしても、世界が分からないものだということは分かっている。ただ、そん
なふうにかえることができるんだってこと。そんなふうにかえれば、いいんじゃないかってこと
。それに、不確かな世界があればこそ、だれかの言葉を信じようという気になるんじゃないかな
。不安だからこそ、不安を取り除く方へ動くんだろう。何も覚えられないからって悲観するこ
とはないよ。だって、生きているんだから。息の仕方が分かんなかったら、悲しいかな死んでしま
うんだよ。悲しいかな、悲しいかな。あたしがガッコウで習うことはそんなことの延長にある
こと、この世界に完全なんて存在しない。この世界に絶対なんて存在しない。頭で考えるから、
見えなくなるんだお。そうじゃなくて、もう知っているんだろ、それが世界の一部でしかないこ
とを。で、それからはあたしの問題。それがあってことを知ってしまったあたしの問題。避け
てはいけないし、なかなか上手く対応できないんだ。ただね、あたしは世界に触れていたいと思
うから、それがたぶん生きるってことなんだろうね、あたしにとって。だれかと触れることと
共に、誰かの思考に触れることが。何を思って生きたのか、それがたぶんあたしにとってすご
く大切なことなんだろう。目覚めよってあたしが言うんだ。そう、その球の外側からね。

きっと、その声は聞こえているんだろう。でも、どう進めばいいかわからないから、なんと
も不安な気持ちになるんだね。だれかと共に生きることができたら嬉しいね。言葉はあたしの生
き方を良くもするし、悪くもする。でも、大丈夫、心と体が知っているから、何があればいいの
かは。

喉が渴けばお茶飲むでしょう、それですよ。休憩、休憩、水分たくさんとってくださいね。そ
したらあたしが働く番です。また、お茶たくさん作りますよ。

この世界にね、限られた時間があるとしたら、それはもうどうにもできないことで、その中で
なんとか生きていかないといけないんだね。だれも越えることの出来ない壁がそこに存在する
んだ。どんな人でも同じ。例外なく同じ。それがどうにも、人の壁なんだ。意識だけが存在し、
そこを越えるものは何にもない。そんな想像をするけれど、だれも見えないんだね。一瞬のこと
、言葉になるわけではない。ふっと過ぎ去るイメージ。この言葉の全てが一度に巡っていき去っ
ていく。

あたしは休憩が終わったのを見ると、またお茶を作り始めた。あたしはこの言葉を分かっている
のだろうか。ねえ、わかんないね。ただ、あたしの中を巡っていくだけのもの。どうにも外に
出たがらないね。なんでだろうか、ただ、グルグル巡っているのが好きみたい。

転がってきたサッカーボールを蹴ってみる。ポーンって、つま先で蹴られたボールはトントン
と練習している人の渦へ流れていった。そして、たくさんのボールの一つとなった。すぐに誰か
がボールを蹴り始める。ボールがいい音をたてている。

気がつかないけれど、何を求めるのかな。毎日同じ制服を着ている。靴は白が基調って学校の決まりがある。基調ってどういうことかな、白っぽい靴ならいいのかな。まあ、どうでもいいか。あたしはなんとなく白い靴が好きだから。そうねえ、校舎の中では学校で決められたスリッパを履くから、白っぽい靴は校舎の外で履きます。白っぽい靴。あたしが見つけたのは、シュツとしたスニーカー、黒いラインが後ろの方に左右二本ずつ入っているの。踵の辺りが部分的に赤いの。ほとんど白、革っぽい感じがするつやつやした表面。紐は黒と赤があったけど、あたしは思い切って赤い紐をつけています。思い切って赤い紐を付けるってなんだかへんだけど、まあ、思い切ったんだ。先生は何も言わないから、べつにいいんだなって思った。でも、靴の紐くらいどうでもいいやんって思うけどね。そうそう、この靴買うときは、母親と少しあったね。母親に連れられていった靴屋さんで、あたしはその靴に一目惚れ、どうしても欲しかったけど、値段を見たら、1万8900円だって。あたしには高すぎますね。でもね、ここからがあたし、ほかのを見ても全然いいと思えないの、母親が「これにしたら」って手ごろなスニーカーを差し出すけど、あたしの顔は晴れないの。結局、「今日はええわ」って言ってしまう。折角買いに連れてきてもらったのに、何にも買わずに帰ってしまうのか。でもね、そんなふうにして終わらないのがあたしなのです。三足くらい、奨められたのに顔を曇らせて、それから、「これが気に入ったんやけど」って申し訳なさそうに言うんだ。それから少し間を開けた後、あたしは勇気を振り絞って言うんだ。「この靴が欲しいです」って指刺しながら。あれから早、一年とちょっと。その靴底は修理の後がある。毎日履いてると底が削れてしまったから、今は底がちゃんとありますよ。ゴムを切って張ったあとがちゃんとあるんだ。あたしのお気に入り、あたしのお気に入り、この靴であたしは高校に行くんだ。あたしの体の一部ではないけれど。あたしの生活の一部。これからも、あたしはこの靴で学校に行くんだ。この靴を履いて、武史を追いかけるんだ。後姿を見つけて、「たけ」って頭をはたくんだよ。「おお」と武史は言いながら、びっくりする。いい加減慣れろよ。あたしは舌を斜めに出して、武史の方を見る。そして、走り去るんだね。武史は多分、笑っているんだろう。

「あつー」

そんなことを言いながら、うちわであおいでたら、汗がぽつぽつ出てきた。縁側に座って、麦茶を飲む。もうそろそろ夏かな。日本列島は所謂「梅雨」に入ったみたいで、むしむしする。雨が降ったりやんだり、なんともいえない天気だ。蛙の鳴き声はどんどん大きくなる。「なんか面白いことないかなあ」そんなことを気がついたら言っている。歩いてみようかな、どうしようかな。どうしたらいいと思う？

どうしようか、どうしようか。

あたしは目を閉じた。目を閉じて何かを得ようとする。音が聞こえる、蛙の鳴き声。車が走り去る音。風が僅かにざわめいている。皮膚に心臓の鼓動が伝播していく。胸を突き上げるような動きを感じる。右手で胸を掴む。あたしは何かを求めようとした。顔を上げ、首を天にさらす。首を右に少し傾けて、少し笑った。「世界は確かにこの手の中にある。でもその世界はあたしの手が届かないところに存在する。あたしはこの世界の何を求めるのだろうか。あたしはこの世界で生きたいと求めるのだろうか。」そこでふと、言葉が詰まった。下唇を軽く噛むと、唇にある傷跡を舐めた。

目を開けても何も世界は変わらない。

聞かないのはあたしのせいかな。聞かないのはあたしのせいだ。でも、あたしだけではない。寝てたら、起こされなくて、逆に寝てていいよってことで、適当に寝てます。でも、眠たくならなけりゃ、聞いていたいですよ。そりゃ、ねえ。でも、眠たいので仕方ないです。額に変な汗をかきながら、タオルを敷いて寝ています。このね、タオルがやわらかくて気持ちいいんですね。ふわふわしていて、ちょっとぐらいよだれがたれても、すって吸ってくれますよ。風が、吹いて世界が流れていきますよ。好きなものは好きだし、嫌いなものは嫌いなんだ。なんで、それだけが全てじゃ駄目なのだろう。そうだね、自分のことはあんまり好きじゃないかな、だって全然ものを覚えないもの。好きなのはなんだろう、偉い人かな。武史はあたしの前で寝てるけど、これでも成績はトップなんですよ。東大行くのかな。そのうち、あたしをおよめさんにしてくれんかな。そしたら、あたし料理作って武史に尽くしますよ。今日もがんばって、お仕事してくださいねって。いいですよ。そんなこと一瞬だけ思い浮かべて、すぐ消す。そして忘れてしまうんだ。ただ、音が耳から入って、出て行くけれど、聞いてないよ。聞かないよ。

三十分くらい寝ていたのかな、そしたら、急に目が冴えて。頭の中がすっきり。残り半分、話を聞いている。ノートにメモをしながら、話の一つ一つを頭の中にめぐらせていくんだ。ぶつちやけ教科書に書いてあることは、どうせ後から読めばいいのやけど。でも、そんなことはどうもただの言い訳のようで。眠くないんやから、学習しようね。武史はあたしの前で寝てますね。背中に何か書いたろかって、思うけど、なんか今は話を聞くのに必死ですよ。言葉がどんどん流れていって、それをこぼさないように捕まえるんだ。板書だけを書くなんてそんなもったいないことはしません。全体で一つ、人の話ってそういうものだろう。

形が大切な、バランスが大切な、コンセプトが大切な。シンプルなこと、一つのこと。世界はいろいろの塊。世界は世界、一つの心。未来が見えないとしても、あたしは何も不安になることはないよ。それよりも、見えない未来を、どう感じるかということ。世界との対話。体との対話。思うことは小さきこと。そしてこの果てに、好きという言葉を使う。きっと、世界は丸いんだ。ぐるぐる、ぐるぐるといつまでも回っていける。どこまでも、いける。でも、あたしはそんなにぐるぐるしたことはない。近いところを動いているだけ。あたしの小さき声は、だれに聞こえるのかな。あたしが読んだ文字は何を表すのかな。疑問ではなく、「我何であるのか、我どこからきたのか、我どこへいくのか」それを感じるということ。答えではなく、言葉を求めている。世界はあたしの言葉を必要とするのだろうか。あたしが世界に言葉を求めるということは、世界があたしに言葉を求めるということ。

あたしは何がしたいのだろう。あたしは何が好きなのだろう。答えではなく、言葉を求めよう。そこに明日があるのだろうか。そこに昨日があるのだろうか。そこに、今日があるのだろうか。そういえば、武史のことは全然浮かんでこないや。へんなの。

美しさと世界。世界のニュースを見るけど、なんかわかんないね。誰かが言ってたよ「地球的視野で考え、地域的次元で行動する」。だれが言ってたのかな。そういえば、おじいちゃん先生が言ってたような気もするな。そんな気もするし、武史が言った気もする。そんな気もする。実感の問題と、想像力の問題。二つを駆使して、どうにかできることかな。聞こえる言葉、聞こえた言葉。世界にはいろいろな問題があり、それは過去から来て、未来へ行く。解決されるものも、解決されないものも、新しく起こるものもいろいろある。あたしは、どうかな。いろいろあるから楽しいんだね。つらいことも悲しいことも、いろいろあるから楽しいんだね。

ほんとうにね。ほんとうにね。あたしはいろいろあるから心が揺れて、心が揺れて、実感があるのだろう。揺れないことは、実感が無いのかな。

いろいろな幻想を拭い去って、陳腐な想像を取り壊して、さまざまな囚われから逃げ出して。侵食をやめないものたちを断ち切らねば、世界の姿なんてあたしには見えないの。どんな思考も、ただの侵食。あたしのなかに思考を植え付ける。確かに、その植えつけられたもの故に、いろんなことが分かるようになったけど、植えつけられた故に、あたしは輝きを失うんだ。頭の中がくだらないことを考えて、あたしを妨げている。あたしは心を解き放つんだ。そう、この澄んだ空に向かって。聞こえる声の方へ、あたしの信じる、言葉の方へ。世界は、美しい。それは、記憶の中に存在した言葉。まだ、あたしの言葉にはなっていないの。本当に世界は美しいのか？

あたしの魂を集めて、あたしを作るんだ。世界のそこいらに散らかった魂を集めてあたしを作るんだ。あたしは、きっと、だれかに授けられたもの。だから、散ったものを集めてだれかに返してあげよう。ずーっと先でもいい。

きっと、そこにあたしの魂がある。それはどこだろうか？

ずいぶん暗い。外灯がまばらにしかないから、ホントに暗いよ。たまにあたしを追い抜いていく自動車のライトがやけに眩しいの。金曜日だから油断して、ちーと遅くなってしまったな。

外灯がない分、星の光があたしを照らしてくれる。きらきら光る、お空の星よ。めずらしいね、星が出てるなんて、最近、空が晴れるなんてなかったから、やになってたのに。自転車に乗るのも憂鬱でした。ペダルをこぐと汗が出てくる。ゆっくり、ゆっくりこいでいるのに汗が出てくる。髪の毛が額に張り付く感触が変。人差し指と中指で少し額を拭ってみると、いい具合に滑っていく。これが何なのかな。首に巻きつけていたタオルを解いて、拭き拭き。

家に帰れば、すぐにお風呂に入ります。そしたら、ご飯が準備万端。あとは寝るだけ、勉強しないといけないけどね。眠気に勝てればいいけど、今週は一勝三敗だからね。負け越し確定ですな。まあ明日は土曜やから、そんなに予習することはないけどね。

武史は不思議に思う。勉強なんて、簡単だ。教科書に書いてあること丸々覚えたら大体片付いてしまう。テストは教科書に書いてないことは絶対に出ないから。そう、教科書を暗唱できれば、それでよろしい。足りなければ、そこからまた始めるだけだしね。

あたしはただ世界のことが知りたいだけ。この世界の本当も嘘も、知りたいだけ。そんなことを言葉にする。そしたら、心が澄んで、空が青く何処までも広がっているのが見えた。遠い空が、そこにはあった。ただ、世界は青く澄んでいた。あたしは、世界のことが知りたいだけなの。疑問に思い答えを見つけるといふのはまた違う感じ。疑問などなく、最初から世界のことが知りたかった。そう最初から。「なぜ？」なんてどうだっていいんだ。ただ、世界を知りたいだけなの。

世界とは、あたしと、あたし以外全て。それで世界。あたしのほかは何でもあたし以外。あたしが武史と話しても、武史はあたし以外。武史と手をつないでも武史はあたし以外。あたしは、あたし以外に囲まれている。そして、あたしと、あたし以外を上手くつなぎ合わせれば、世界。料理のように、微妙なバランスで味が決まる。

そんな世界のことが知りたいだけなの。

で、世界史を勉強。おじいちゃん先生の授業を受けてます。世界史の教科書は、言葉で説明が書いてあります。人の名前、年号、出来事、それを重ねて、物語が綴られています。あたしたち人類は、言葉、文字を使って、歴史を記憶にとどめてきました。でも、それはあたしの知っている記憶です。きっと、あたしの認識していない記憶もどこかにはあるはずだとは思ふ。たとえば、あたしの体の中にも記憶があるのではないのか。つまり、からだ自体が、文字の役目をしているの。あたしを知れば、人類が見えてくるのかも。世界史は、人の歴史なの。変だな、あたし以外とあたしが世界のはずなのに。たぶん、それはだれかの記憶の編纂の仕方に依っているの。世界史はだれかの、世界の認識の仕方が書いてあるんだね。あたしは、思う。世界を知ることは、それ以外も知るといふことだとね。あたしって欲張り。なんで、そんなこと思うのだろうか。

今の時代、情報化社会と呼ばれて、そんでもって、インターネットなんかあって、何でもかんでも、インターネットを使って検索するんだ。なんでもかんでも、でも、限られた情報。インターネットは世界にある情報の多さを視覚化してくれただけ、でも本当の情報はそんなものでは取まらない。情報化社会は、情報の多さを人が認識しただけの話。昔も今もそんなに必要なことは変わらない。

世界のことを尋ねても、結局答えはあたしの中にしかない。世界は、あたしとあたし以外との二つだけなの。あたしが学ぶ理由はただ、世界を知りたいから、それだけなの。唐突だけどね。

「So let's get truth」それを胸に掲げて、いまここにあるんだ。あたしっていう旗があるとしたら、その文字を書くね。日本人だけど、英語。あたしは何を求めるのか。それが分かるから、形ある矛盾が生まれるね。

世界とは何なのかという問いに答えを見出そうとするのではなく、世界のことが知りたいだけなの。どう違うのかは、感覚的でなんとも言い難い。だれかが書いたことが知識として、本の中に入っているの。それを見るのが好き。訳のわからないことは、きっと目を見張るくらいのもなのかもしれない期待がある。世界のことが知りたい。だから、あたしはこうして生きている。世界のことを知ってどういうことなのかは分からないけれど、世界のことを知ったら、それがどういうことなのかは分かるでしょうよ。ただ、望むだけ。問うことは、問いを見出すところから出発し、問いに答えることで終了する。知りたいと願うことは、始まりも終わりも渾然一体としている。願った瞬間に終わるんだ。そんなところのこと。

裸になってお風呂に入る。湯船の中でブクブクと口から泡を出す。顔を半分湯の中に沈めた。素早く立ち上がると、湯が体に纏わりつくのを感じる。湯が下へと、水滴となって落ちていく。

台所へ行けば、父さんがビールを飲んでいて。あたしが風呂から上がるのを待っていたらしい。パジャマとパンツが並べて置いてあった。あたしは、冷蔵庫の扉を開けて少し冷たい空気を感じる。それからペットボトルに入った麦茶をだしてコップに注いだ。タオルで汗を拭きつつも、麦茶を飲んだ。父さんに「おやすみなさい」と言い、台所を後にする。

家の外には夜が広がっている。家の中でも、夜は夜なんだけれど、光があるから闇ではないよ。広がっているはずの夜が怖い。なんだか、怖いんだ。夜があたしを侵食していく。パクパクとあたしを食べていくんだ。心臓の辺りから、砂粒くらいずつ、食べていくんだ。そしたらね、食べられるたびに変な感じになるの。あたしの存在が宙に浮いていくような、体は重たいままなのに、世界からあたしが遊離してしまうかのような、そんな感じ。あたしは、存在しているのだろうか。本当にこの世界にあたしはいるのだろうか。そんな疑問。自分の存在を確認するために、左手で顔から、首から、胸まで触れる。目を閉じているから、手のひらの感覚で、形を再確認する。こんな形だったんだと、驚きと共に不安が押し寄せる。あたしってこんな形だったのだろうか。訳が分からず、不安。記憶と照らし合わそうにも、形の記憶が出てこない。あたしの体のことなのにね。体から、あたしが離れていくよう。たぶんすこし、ほんの少し、蟻の足の太さくらいずつだけだろうけどね。それでも、自分の体からあたしが離れてしまうみたい。息をするのも苦しくなっている。頭が変になってしまったのだろうか。

武史に「付き合っ」って言った。「だんめえ」って、笑顔で、漫才みたいに返された。あたしがボケで、武史が突っ込み。「別に、そんなのどうでもいいやん」って。どうでもよくても、あたしにとっては、どうでもよくなかった。少し悲しかった。それでも武史はあたしの前にいる。あたしの目の前で、すやすや寝ているんだ。たまに、ビクって肩が揺れる。

土曜の午後、家に帰ると、お姉ちゃんがいた。お姉ちゃんは子供を抱えて、「ひさしぶりやん」と少し眠たそうな顔で言った。今から、散歩に行くところらしい。ベビーカーが外にあったわけが理解できた。

「啓太と散歩いってこよか」

とあたしは、お姉ちゃんの間を見ながらいつもよりはっきりした声で言った。啓太っていうのは、お姉ちゃんの子供のこと。お姉ちゃんは、一つほっとした感じで、あたしに「頼むわ」って言い放つ。「啓太、ひさしぶりやね、また大きくなったなあ」と、啓太の顔をのぞきこんで、ほっぺをつんつんしてみた。啓太は、いやいやというふうに、顔をそむける。

あたしは着替えてきて、啓太と散歩にいった。ベビーカーを押しながら、散歩、散歩。上手く押せるか心配だけどね。道路に出るけど、歩道なんてないから、車が来ないかすごく心配。周りをきよろきよろしながら、川沿いの散歩道までいそいだ。川沿いまで行けば、車なんてほとんど通りません、目の前の田んぼで作業する人が使うくらいやから。夕涼み、風が心地よく過ぎていく。啓太は、ほとんど寝てるみたいな感じ。世界はたぶんこんなふうに美しいんだね。啓太と向かい合っていると、なんかたのしいね。丸っこい顔が、体が、手が、優しい気持ちにしてくれる。「せいかいはうつくしい」そう、世界は美しいんだ。きっと、あたしと、世界をちいさき人が繋いでいる。始まったばかりの人生、そうは思えないね。この子に言葉があれば、そう思っているのかな。でもなんかね、言葉でないところで、全部分かっているきがするんだ。そう全部、この世界の何もかも、分かっている気がする。あたしが昔、そうだったような気がする。そんな記憶を、啓太に投影している。啓太から、あたしに光がさして、影ができたんだね。そして、その影が啓太の顔に映っている。言葉を知る前の記憶が影として出たよう。一歩進むことに注意して、足のうらの感覚を意識して、右足と、左足を確認する。記憶が伝播する。記憶が世界を巡っている。人の記憶、言葉にはならない記憶。すでにそこにあって、そこにあるから、気付くことはなくて、だれかがこうして、光をかけてくれるまで、内にこもってしまっているそんな記憶。学校にいるときよりも、ゆったりと時間が流れていることは、その誰かのせいで、そのだれかは、あたしと啓太を足し合わせて、何かに二つ分けた片一方で、それが誰かなのだ。そのだれかは、あたしではあるが、あたしそのものじゃないの。そして、もう一つの誰かを、啓太に託すんだ。啓太は、すやすやという感じで目を閉じている。

世界のことが知りたいの。ただそれだけなの。そういう意識で、ただこの世界に存在したい。生まれたら、死ぬんだ、この世界のルール。そして、その世界に存在していることを知ってしまったことから、いろんなことがあたしからこぼれてしまって、忘れてしまって、小さくなってしまって、取るに足らない些細なことに成り下がってしまった、そんな記憶。啓太はいろいろ教えてくれる。ただあたしが顔を見ているだけなのにね。

歩みを止めて、川の流れに目を向ける。意識をそっちの方へ向けるんだ。川の流れは水しぶきと、音ゆえに分かる。「あいちゃんねえ、今日、ふられたんよお」隣にいる、啓太に聞こえるように、啓太にだけ、聞こえるように。啓太はただ目を閉じている。「あいちゃんねえ、ほんまは悲しいんよ」少し俯きながら、あたしにしか聞こえないように言う。「あいちゃんねえ、啓太のおよめさんにしてくれる？」言葉にはしないで、こころの中でつぶやいた。

啓太が、目を覚まして、ぐずりだしたから、あたしは啓太を抱き上げる。啓太の体温が伝わってくる。風は涼しい。いつになったら、啓太はしゃべりだすのだろうか。あたしは「あいちゃん」って、啓太に呼ばそう。啓太はなんて呼ばれたいのかな、「けいた」ってあたしはこれからも呼ぶだろうけど。「あいちゃん」って、あたしの方に抱きついてきたら、満面の笑みで抱い

てやろう、それが、啓太って存在。

「おねえちゃん、帰ったよ」。昼の部屋を覗き込めば、おねえちゃんはタオルケット一枚に包まって寝ていた。あたしは、ゆっくりと近づくと、啓太の手を持って、ペシペシとおねえちゃんの顔を叩かせた。おねえちゃんは、しばらく無反応だったけど「もうちょっと、遊んでやって」って、あたしに言った。「わかったあー」。そういうと、啓太を抱えて勉強部屋にいった。世界史の教科書を持たせてみたが、すぐにかぶりついた。よだれで、べたべたしている。首に巻いていたタオルで拭く。べたべたはすぐにとれた。ボールを握らせてみる。サッカーボールと同じ縫い目の小さなボール。啓太はこれにもまたかぶりついた。今度は、あたしは取り上げなかった、そんなに汚いものじゃないし、よだれで濡れても大丈夫だから。ボールを放すと、口をパクパクさせながら、部屋を見ている、あたしを見ている。啓太は何を知っているのだろうか。

お父さんと、お母さんが帰ってきたら、啓太は、お父さんとお母さん、つまり啓太にしたら、爺さんと、婆さんのところへ行った。なんか、彼氏を取られたみたいで嫉妬。

啓太が帰ってから、家から笑顔が減った。啓太が来たら、急に増えたけど、帰ったら急に減った。何を思っても、同じ。ただ、笑い声が元に戻っただけ。

空の下で、あたしは、あなたに出会ったんだよ。それがあたしの心のさま。

美佐と一緒に話していたら、こないだの啓太のことをついつい話してしまった。話はしたけど、あたしの心の内の一割も高揚感は伝わっていない。美佐は、少しあたしに合わせながら、話を聞いてくれた。美佐に、聞いてもらった感が、心を埋め尽くす。もっと、美佐にも実感できるような話できたらよかったのだけど、いまは啓太のことが話したくて、話したくて、口が求めているんだ。一通りあたしが話し終わると、美佐が、武史の話をし始めた、あたしはさっきの美佐と違うって変わって、心が揺れ動く。「武史がさあ」という具合に始まれば、その答えは決まっている。「やっぱ、なんでも出来るからすごいよねえ」。これが、答え。ちなみに、勉強の話ですよ、なんでも出来るってところは。「ほんとすごいよねえ」、あたしも同じことを言う。

心はそこにあるのだろうか。疑問。テレビに映る映像が、答えを示すとき、そこに言葉があるのだろうか。ある、いや、無いだろう。あたしのうちではなく、テレビの画面にこそ、答えが映しだされている。見る世界は、あたしの目が見る世界とは、全く異なったもの。全く、ことなったものなのに、あたしは実際、そのテレビの見せる映像に、魅せられている。滑稽かな、滑稽かな。

あいは、ペンをノートに走らせている。xやyなどを、=でつないで、等式をつなげていくんだ。=がどんどん、どんどん、繋がって行って、綺麗な形になるまで。それで、オシマイ。だけれどね、ペンを走らせて、頭の中を映しだしているの。手で考えているっていうの。あいの頭じゃ足りないからね。

書いても、書かなくても、同じだけれど、それでも、書いたことが、そこにあると、なんか実感があるから不思議だね。書いたこと全部、わすれてしまっても、なんか、あたしがやり遂げたという実感があるからね。

心は、そこにあるのだろうか。ただ、の記号しか見えないのか。言葉、つまり日本語を書けば、説明となって、形をみいだすのだろうか。そこに、生きていく答えはあるのだろうか。何かを作り出すのとは、訳が違う。でもね、本当はね。何をしても同じなんだろう。同じ、同じ。どんな仕事をして、どんな暮らしをしていても、結局同じ。違うのは、その人が満足できているかどうか。本物の中で生きていると感じられるかどうか。曖昧で、惰性で、生きてしまったら、それこそ、もったいない。でも、みんなもったいないことばかりしているよな。人には偉そうに言うくせにね。

本物を求めること。それは、心に従うこと。きっと、世界はもっとすばらしい。でも、なんかね、大量生産、大量消費は、本物でないものを、CMに乗せて、ばら撒いている。価値が、価値を失わせている。本物は、違うと叫んでいるのに。それが聞こえないんだ。決して消えない火の光、それをあたしは、心にともして、育てるんだ。水をかけられても消えないように。

「あいちゃんねえ、何になればいいと思う」

啓太に尋ねた。そしたら、ほっぺをギューってつねられたんだ。この痛みを感じろってことか。啓太は分かっているね。ほんと、くだらないこと言ったね。

夏季休業中、そんな夏休みに入ったけれど、午前は補習があり、午後からは部活があるから、なんだか毎日が土曜日みたい。やっぱり、これくらいがいいな。毎日が土曜日くらいが、ちょうどいい。比較的楽だし、暗くなる前に家に帰れるし。電車も空いてるし、言うことなしですよ。ま、宿題は山のように出ているけどね。ほんと山のように、終わるのかしら、できるのかしら。とほほ。考えるな。そんなの量を日にちで割っても何もでてこないよ。

武史は、予備校の夏期講習を受けているんだって。補習も受けなくていいのに、勉強してるんだね。冷房の効いた部屋で、勉強してるんだね。あたしはね、汗をタオルで拭き拭きしながら勉強してますよ。そう、そんなのが勉強って感じがするからね。

かけがえの無いものを守れるか。なかなか、そんな場面ないけれど、生きていたら一度くらいはあるんだろうね。それも瞬間的に行動できるかどうかのところだろうね。

さて、あたしは、どうかなあ。

世界をあたしはどうしたいんだろう。世界っていうところであって、あたしはどうしたいんだろう。そんなこと。あたしはいつまで生きたいのだろうか。そりゃあ、死ぬまで生きたいよね。でも、でも、あたしがこの世界に生きることで、世界は変わるのだろうか。全然、変わるとは思えない。あたしがいても、いなくても、同じような気がしてしまう。でも、そんなとき、あたしの場合は、とりあえず、それなら、生きていよう。そんなふうに思うんだ。どっちでも同じなら、生きていようってね。なんでだろう。なんでかな。忘れてしまったけれど、だれかとの約束のような気もする。それとも、あたしがあたしで決めたことのような気もする。忘れたな。

世界はあたしをどうしたいんだろうか。世界っていう掴み所の無いものを思うことがそもそもの間違いなんだろうか。ただ、何となく、飯食って、学校行っていけば、それで生きていけるのに。こんなこと考えても無駄なの。ただ、そこにあるだけでいいんだから。

学校の先生は、たぶん答えてくれないだろうなあ。

昨日よりも、明日の方が、先にある。そんな類のことだろう。あたしは、何を思えばいいんだろう。あたし、ほんものになりたいな。

定期試験は一年に四回だけ前期中間と前期期末、後期中間と後期期末。最後は学年末っていうんだっけかな。この前のテストは前期中間試験、成績表を見た三百五十三分の百六十七ってありました。これって、よかったんだね。でもでも、英語は下の方。一年の最初のテストが悪すぎたから、どうにもこうにも立ち直れません。次のテストは九月の終わり、夏休みが明けてから。どうなることやら、どうなることやら。それに九月の頭には、実力テストがあるからね。実力って、なんの実力なんだろう。そりゃあ、科目の実力だろう。

いろんなことに知らず知らずの内に縛られている。縛られているというか、それを元にして暮らしているんだ。なんていうのかな、今まで世界が築き上げてきたものごと。私はそれに囚われているんだね。囚われて囚われて、いつしか何も出来なくなってしまうだろう。世界は自由なのに、自分で形を定めてしまって、それが全てでよくなる。私たちは気がつかない、僕たちは気がつかない。みんな知っていたはずなのに、忘れてしまうんだ。世界の形はもともとあったものではなく、人の想像。世界は私たちの答えを待っている。あたしは、世界の求める答えを探している。

この世界の形が変わっていくことが、人に血が巡っていくのと同じこと。変わらない世界など、生きている世界ではないのだろう。世界の形は変化してこそ、世界だ。

力は全部そらにある。空から降ってくるんだ。あたしの体に、降ってふるんだ。力は全部、空にある。空にあるのはあたしの心。心がそらから降ってくるんだよお。きっと夢になるけれど。そらが、そらである限り。どこかで見たことのある言葉を越えてくるんだ。

世界は変わり続けねばならないの。それが答え。

おわり。